

モジュール交換方式を用いた国際遠隔授業の評価

-2005年シドニー大学から岐阜大学へ配信された遠隔授業について-

Assessment of International Distance Lectures through "Module Exchange" System

-On the International Distance Lectures delivered from the University of Sydney to Gifu University in 2005-

西澤康夫*・Sonia Mycak**・今井亜湖*・江馬 諭*・加藤直樹***・小林一貴*
NISHIZAWA Yasuo*, Sonia Mycak**, IMAI Ako*, EMA Satoshi*, KATO Naoki***, KOBAYASHI Kazutaka*,
松原正也***・山田敏弘*・大和隆介*・Andrew Bilinsky**
MATSUBARA Masaya***, YAMADA Toshihiro*, YAMATO Ryusuke*, and Andrew Bilinsky**

本研究では、「モジュール交換」方式を用いてシドニー大学から岐阜大学に配信された国際遠隔授業を対象に、遠隔授業の内容と位置付けについて検討した。また、受講生を対象に遠隔授業の評価と理解度に関するアンケート調査を行った。その結果、次のことが明らかになった。受講生の遠隔授業に対する興味・関心は高い。遠隔システムに関して、3地点を結んだ国際遠隔授業を実施することができ、技術的な問題はほとんどみられなかった。授業内容と教授法に関して、評価が非常に高く、授業内容、講師の説明の仕方や話し方、授業で使用したハンドアウトなどは適切であった。受講生に関して、聞き取り能力や語彙力を高めることが重要である。また、受講生の聞き取り能力や語彙力を調査し、それに応じて講師の説明の仕方や話すスピードを調整することや、授業を受けるために必要な英語の力を授業案内に明記しておくことも重要である。ハンドアウトを事前に配布し、予習させることが大切である。一方で、「モジュール交換」方式による遠隔授業の内容と位置付けは非常に重要であり、十分な打ち合わせと準備が不可欠である。

キーワード：テレビ会議システム、国際遠隔授業、モジュール交換、授業評価、分散分析

1. はじめに

近年、通信技術・機器が急速に進歩するとともに、平成9年12月の大学設置基準等の改定により遠隔授業での単位取得が大幅に緩和された。また、これに引き続く法改正により海外の大学での単位取得も可能となってきた。このような技術的あるいは社会的状況の変化の中で、多くの大学が国際遠隔教育に取り組み、貴重な成果を上げている（例えば、浦野2000、八木ほか3名2001、西原・ほか5名2002、福田・ほか2名2002）。

一方、国際遠隔教育においては、両大学にとって特に両大学の学生にとってメリットがあること、持続可能であること、既存のカリキュラムを大きく変更する必要がないことなどが、重要である。このような条件を満たす一方策として、著者らは「モジュール交換」方式を提唱した。この「モジュール

* 岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University, 1-1 Yanagido, Gifu-shi, 501-1193, Japan)

** シドニー大学文学部 (Faculty of Arts, The University of Sydney, Sydney, NSW 2006, Australia)

*** 岐阜大学総合情報メディアセンター (Information and Multimedia Center, Gifu University, 1-1 Yanagido, Gifu-shi, 501-1193, Japan)

ル交換」方式とは、既存の授業を対象としてその中の1回分の講義をモジュール（授業を構成する基本ユニットの意味）と呼び、同じ数のモジュールをそれぞれの連携大学が提供する方式のことである。

平成14年度と15年度の2年間、岐阜大学とオーストラリア・シドニー大学との間で「モジュール交換」方式を用いた国際遠隔授業に関する実証実験が行われた（江馬ほか10名2004）。さらに、平成16年度には、「モジュール交換」方式を用いて表1に示す遠隔授業が行われた。これらの遠隔授業は、両大学の学部間交流協定に基づいて行われたものである。また、平成16年度にシドニー大学から岐阜大学に配信された遠隔授業は、岐阜県国際ネットワーク大学コンソーシアムを介して、岐阜聖徳学園大学にも配信された。

しかし、このような「モジュール交換」方式を用いた遠隔授業はほとんど実践されていない。そのため、既存の授業に対する遠隔授業の位置付けやその評価に関する研究は、ほとんど行われていない。そこで本研究では、表1のシドニー大学から岐阜大学に配信された授業を対象に、遠隔授業の内容と位置付けや教育効果について検討した。また、遠隔授業の評価と理解度に関するアンケート調査を行った。その結果、授業改善のための有益な資料が得られたので、以下に報告する。

表1 モジュール交換方式によって実施された遠隔授業

大学・学部名	開講授業名	モジュール交換の回数
シドニー大学・文学部	Readings in Japanese Linguistics (日本語学演習)	2回の遠隔授業を受入
岐阜大学・教育学部	異文化コミュニケーション論	3回の遠隔授業を受入

2. 遠隔授業

2.1. 遠隔授業の位置付けと準備

表1に示した授業「異文化コミュニケーション論」は、岐阜大学教育学部が開講している授業であり、生涯教育講座および生涯教育課程に所属する学生が主な対象である。またこの授業は、オンデマンド方式によるeラーニング授業として、岐阜県国際ネットワーク大学コンソーシアムに参加している大学の学生にも開放されている。受講生は、教育学部で4名、岐阜県国際ネットワーク大学コンソーシアムで5名であった。

表2は、学生に提示された授業案内の一部であり、この授業の日程を示している。また、この授業の概要は次の通りである。「かつて、仏教、道教、儒教の影響を強く受けた日本は、開国によっていち早く近代化を成し遂げたが、負の遺産とも言うべき様々なひずみも見られた。本授業では、一方で日本人が外国の文化を積極的に受容しつつ、他方でどのようにして民族としてのアイデンティティを守り続けてきたのかを探る。また、日本文化が世界に向けて発信された典型的な例を検証しながら、今後、国際社会の中で日本が確固たる地位を占めてゆくために必要な基本姿勢を探る。」

海外から配信される遠隔授業の内容や既存の授業に対する位置付けは重要な課題である。前章で述べた平成15年度の実証実験の結果（江馬ほか10名2004）や、平成16年1月のシドニー大学訪問においても、このことが指摘されている。そこで、両大学の授業者が連絡を密にし、シドニー大学から配信される遠隔授業が「異文化コミュニケーション論」の内容と受講する学生のレベルに適したものとなるよう、細心の注意が払われた。

平成16年度、6月初旬に、岐阜大学を訪問した講師（共著者）と授業に関して打ち合わせをする機会に恵まれた。しかし、この時点では授業の骨格がまだ完全には定まっていなかったため、後期に「異文化コミュニケーション論」という授業を開講する旨を伝えるのがやっとであった。しかし、11月中旬にも、たまたま東京に滞在中の講師と面会した。このときは、すでに何回か授業を行っていた

ので、やや詳しい打ち合わせを行うことが出来た。授業内容として、オーストラリアの移民の歴史、多文化主義、アボリジニとの共生・交流などのテーマについて講義するよう依頼した。その際こちらとしては、明治以来の日本文化を、近代化と西洋化の歴史の中で捉え返し、その変貌の軌跡をたどりたいということ、とくに、岡倉天心の「茶の本」や、世界的な映画監督として海外でも知られている黒澤明や小津安次郎の映画についても、授業で取り上げていることを伝えた。講師はすでに「茶の本」を読んでおり、東洋と西洋との対等の出会いを夢見る天心の、時代に先駆けた見識を評価している様子が伺えた。

さらに、12月から、1月にかけて、同じ講師が行うシドニー大学での集中講義に参加させるべく、教育学部の学生10名を引率した際、第3回目の講義に関して、提案を受けた。この講義に関しては、すでに、ある文化人類学者との交渉がうまく行かなかったため、別の人を探しているとのメールを受け取っていたが、現地で別の講師の紹介を受けた。この講師とは余り多くを語る機会に恵まれなかったため、一抹の不安を残して帰朝することになったが、帰朝後間もなく、この方も都合が悪くなったため、自分が代わりにやっても良いかとの連絡が入った。結果的には、これが返ってよかったかもしれないと思われる。というのも、講師は、時間的余裕を持って日本とオーストラリアとの関係に触れることが出来たからである。特に第二次世界大戦での敵対とその後の急速な関係改善の歴史や、岡倉天心の思想家としての先見の明を高く評価するなど、既存の授業とのテーマ的なすりあわせが、思いのほか深く進展したからである。また、シドニー大学訪問中に、コミュニティー間の交流というテーマを是非取り込んでもらいたいと、申し入れたところ、ちょうどそれにふさわしい題材がある、と言って、後に紹介するアボリジニと、レバノン人たちの交流の物語が授業に取り入れられることになったのも、収穫であった。

また、正規の受講生が少ないので、英語に慣れたことで意欲がさらに湧いている、シドニー大学での集中講義を終えたばかりの参加者を、ゲストスチューデントとして授業に参加させることについて、大学滞在中に講師の了解を得、帰朝後、学内での了解をも得て参加させることとなった。

一方、講師が授業で使用する英語のレベルと会話のスピードは、受講生の授業理解に大きく影響する。しかし、この授業を受講している学生がどの程度の英語能力を持っているのか明確ではない。そこで協議の結果、出来るだけ平易な言葉を用い、ゆっくりと話すことで合意した。

以上の結果、シドニー大学から配信される遠隔授業は、表2に示すように第8週目、第9週目、第10週目に組み込まれることになった。

表2 授業案内

週	日程
1	異文化コミュニケーションとは何か
2	異文化コミュニケーションと日本語
3	異文化コミュニケーションの先達 (その1 新渡戸稲造の場合)
4	異文化コミュニケーションの先達 (その2 岡倉天心の場合)
5	異文化コミュニケーションの先達 (その3 鈴木大拙の場合)
6	異文化を伝える媒体としての映画 (その1 黒澤明の場合)
7	異文化を伝える媒体としての映画 (その2 小津安二郎の場合)
8	オーストラリアの多文化主義 (その1)
9	オーストラリアの多文化主義 (その2)
10	オーストラリアの多文化主義 (その3)
11	現代日本文化の特色
12	異文化コミュニケーションと言語教育
13	レポート提出 (授業で取り上げたいいずれかのテーマについて参考書を読み、自分の意見をまとめる)
14	
15	

2.2. 遠隔授業の概要

表3に、遠隔授業の概要を示す。第1回目の講義では、イギリスの植民地時代を経て、1778年にオーストラリアが国家として成立した経緯、またその後、オーストラリア政府の採ってきた移民政策、また、第二次世界戦争を契機に大きな方針の転換が行われた事情を、オーストラリア国内はもとより、広く世界の情勢と絡めての明快な概説を聞いた。

第2回目の授業では、オーストラリアと日本との現在の関係にも触れながら、アジアを含めて、オーストラリアが世界中から移民を受け入れる国として、それぞれの移民たちが、自分たちの文化を最大限尊重できる環境を用意する政府の姿勢と、そのことで起こる様々な問題を次々に解決しながら、どんどん発展を続けている様子について、ビデオなどを使いながらの説明をうけた。

第3回目の講義では、第2回目の授業で、エコーが入ったため聞き取りにくかったビデオを最初に聞きなおしてから、現代のオーストラリアが抱えている世代間の断絶の問題などを復習してから、講師の著書の一部（短いラジオドラマ）を教材にして授業が進められた。これは、オーストラリアのアボリジニの人たちと、レバノンからの移住者とが隣同士で暮らしながら、30年ものあいだ交流なしだったのが、オーストラリアの建国記念日に、レバノン人の老夫婦が思い切って隣家を訪ねたことによって、交流が始まった物語だった。全く異なる文化的背景を持ったものたちが、垣根を越えて交流することで、お互いにオーストラリア人としての共通の絆に目覚め、もはや根無し草ではなくなり、あまつさえ、世代間の断絶に苦しんでいた息子とも、同じオーストラリア人としての一体感を味わうことが出来た、という物語は、異文化コミュニケーションの何たるかを象徴的に示すエピソードであり、既存の授業のテーマにもよく適合していた。

これら3回の授業はともに、一人のオーストラリア人講師によって行われた。講師が授業で使用した言語は英語であった。また、授業日の数日前に、講義で使用するハンドアウトが学生に配布された。前節で述べたように、授業「異文化コミュニケーション論」の受講生は、教育学部で4名、岐阜県国際ネットワーク大学コンソーシアムで5名である。通常、コンソーシアムの5名の学生は、オンデマンド方式でこの授業を受講している。しかし、遠隔授業をライブで受講したいという希望があり、岐阜聖徳学園大学にも3回の遠隔授業が同時に配信された。表3の受講生の欄に示した人数は、遠隔授業をライブで受講した学生数であり、括弧内の人数は岐阜聖徳学園大学での学生数である。

上述したようにこの授業の受講生の数は多くない。また、遠隔授業の内容や講師が授業で使用する英語のレベルと会話のスピードは、受講生の授業理解に大きく影響する。そこで、表3に示した学生にもゲストとしてこの遠隔授業に参加（受講）してもらい、後述するアンケート調査に協力していただいた。これらのゲストとして参加した学生は、主に生涯教育講座および英語教育講座の院生と学生である。なお、ゲストとして参加した学生のことを以後、ゲスト参加学生と呼ぶことにする。写真1に岐阜大学での授業の様子を示す。

表3 遠隔授業の概要

	第1回目	第2回目	第3回目
実施時期	平成17年1月11日（火）	平成17年1月18日（火）	平成17年1月25日（火）
講義内容	オーストラリアの 多文化主義（その1）	オーストラリアの 多文化主義（その2）	オーストラリアの 多文化主義（その3）
講義時間	70分	70分	80分
講義の使用言語	英語	英語	英語
講義形態	説明型	説明型（一部対話型）	説明型と対話型
受講生	4名（1名）	5名（1名）	2名（0名）
ゲスト参加学生	10名	8名	7名



写真1 授業の様子

2.3. システムの概要

遠隔授業で使用した機器を表4に示す。授業は、IP接続によるテレビ会議システムを用いて行われた。この接続に用いたプロトコルはH.323である。また、転送ビットレートは安全性を考慮し384kbpsとした。なお、シドニー大学で使用したテレビ会議システムは、表に示すように第1回目の授業と第2, 3回目の授業で異なっている。

表4 使用機器

岐阜大学	岐阜聖徳学園大学	シドニー大学	
		第1回目の授業	第2, 3回目の授業
テレビ会議システム (Polycom社製 Viewstation)	テレビ会議システム (Sony社製 PCS-1)	テレビ会議システム (Polycom社製 Viewstation)	テレビ会議システム (Polycom社製 iPower 9000)
プロジェクション型モニター	プロジェクター スクリーン 約3×3 m	プロジェクター スクリーン 約2×2 m	Sony社製 VPL-PX35 スクリーン 2.3×1.7m
		資料提示装置	資料提示装置

2.4. アンケート調査の方法

「モジュール交換」方式を用いた遠隔授業の評価と改善を目的に、受講生およびゲスト参加学生を対象としたアンケート調査が行われた。この調査は4つの大きな質問から成っている。質問Ⅰは、受講生の属性（年齢、性別、英語の学習歴）に関するものである。質問Ⅱは、文献を参考に「興味・関心等」、「遠隔システム」、「授業内容や教授法」、「受講生」、および「授業環境」の5つの因子について、遠隔授業の評価を測定するためのものである。詳細は次章で述べる。質問Ⅲは、授業の理解度を把握するための小テスト（宿題）である。詳細は次章で述べる。質問Ⅳは、自由記述によって意見・感想を求めたものである。

前節で述べた授業の直後に、アンケート調査用紙を配布し、記入を依頼した。ただし、質問Ⅲは第1回目の授業に対してのみ行なわれ、次回までの宿題として生徒に課せられた。また、岐阜聖徳学園大学の学生に対してもこのアンケート調査が行われたが、受講者が1名であったので調査結果の提示は割愛する。

3. アンケート調査結果および考察

3.1. 受講生の属性について

アンケート調査の回収率は、いずれの授業においても100%（第1回目の授業：13人/13人，第2回目の授業：12人/12人，第3回目の授業：9名/9名）であった。アンケート調査の質問順にその結果を述べる。

授業の出席者が多い第1回目の調査結果を基に、受講生の属性について述べる。受講生の平均年齢は23.1歳，男性が1人，女性が2人，英語の平均学習歴は10.3年であった。ゲスト参加学生の平均年齢は24.6歳，男性が3人，女性が7人，英語の平均学習歴は11.0年であった。

3.2. 授業評価について

受講生による遠隔授業の評価を測定するために、表5と表6に示すアンケート調査（質問II）を行った。この調査は、5つの因子からなる19項目の質問により構成されている。その内容は、「興味・関心等」、「遠隔システム」、「授業内容・教授法」、「受講生」、「授業環境」の因子で構成されている。回答は選択式であり、質問に対して「大変肯定的である」、「少し肯定的である」、「少し否定的である」、あるいは「大変否定的である」と思うものを一つ選択する。この調査の分析については、「大変肯定的である」から「大変否定的である」に4から1の点数をあてはめて数値化した。ただし、因子「受講生」の2番目の項目の質問方法が他の質問方法と逆なので、「大変肯定的である」ときに1点を、「大変否定的である」ときに4点をあてはめた。また第1回目の調査では、「興味・関心等」の因子に関する調査が行われなかった。表5と表6には、質問に対する回答、すなわち項目別尺度平均値（Av.）とその標準偏差（S.D.）の値も記入されている。この調査結果を基に、以下の分析を行った。

第1回目の授業では、調査対象者内1要因4水準の分散分析を行った。第2回目と第3回目の授業では、1要因5水準の分散分析を行った。その結果、第1回目の授業では、受講生について要因の主効果に有意差が認められた（分散比 $F = 7.72$ ，自由度 $df = 3,11$ ，有意水準 $p < 0.01$ ）。ゲスト参加学生についても、要因の主効果に有意差が認められた（分散比 $F = 5.42$ ，自由度 $df = 3,39$ ，有意水準 $p < 0.01$ ）。第2回目の授業では、受講生について要因の主効果に有意差が認められなかった。しかし、ゲスト参加学生について、要因の主効果に有意差が認められた（分散比 $F = 6.17$ ，自由度 $df = 4,39$ ，有意水準 $p < 0.01$ ）。第3回目の授業では、受講生とゲスト参加学生ともに、要因の主効果に有意差が認められなかった。ただし、第3回目の授業における受講生の人数は2名であり、統計処理はあまり意味がない。さらに、有意差が認められた授業では、最小有意差（LSD）法に基づく多重比較を行ない、因子の評価順位を判定した。また、授業間あるいは学生のグループ間での大まかな授業評価を比較するために、授業別での評価の平均値を求めた。表7は、以上のように求められた因子別尺度平均値、評価順位（表中の丸付き数字）、および授業別平均値を表している。

まず、調査結果の全体的な傾向として、表7より次のことが明らかである。受講生とゲスト参加学生ともに、表の最下欄に示した授業ごとの評価の平均値が3点以上であり、全体としては高い評価が得られている。その中で、受講生とゲスト参加学生ともに、第1回目の授業に対する評価は幾分低いが、授業を重ねるごとに評価は高くなっている。受講生とゲスト参加学生を比較すると、第1回目と第2回目の授業でゲスト参加学生の評価の方が幾分高いが、第3回目の授業では両者の評価はほぼ等しくなっている。各因子に関して、授業や学生のグループによって多少のばらつきが見られるが、「興味・関心等」と「授業内容・教授法」の因子の評価が最も高い。ついで、「遠隔システム」や「授業環境」の因子の順となっており、「受講生」の因子の評価が最も低い。第1回目と第2回目では、「受講生」の因子の尺度別平均値の値は、2点台である。

上述したように各因子の大まかな評価が明らかになった。そこで、因子内の各項目についてさらに

詳しく分析する。「興味・関心等」の因子に関して、受講生とゲスト参加学生ともに、国際遠隔授業に対する興味や関心は高く、国際遠隔授業は有益であり、今後も継続すべきであると答えている。

「授業内容・教授法」の因子に関しては、いずれの授業においても、また受講生とゲスト参加学生ともに最も評価が高い。しかし、表5の回答の値に下線が付いている項目では、受講生の評価がわずかに低く、そのばらつきは非常に大きい。項目1「本日の授業内容は、このコースの内容として適切でしたか?」。項目2「本日の授業で使用したパワーポイントの資料は、理解の助けになりましたか?」。項目3「講師の説明の仕方や話し方は、分かりやすかったですか?」。項目4「講師の話すスピードは適切でしたか?」。このことは、受講生個々によって評価に大きな差があることを意味している。つまり、英語の語彙力や聞き取り能力が十分でない学生は、遠隔授業で始めて接した講師の話し方に慣れておらず、講師の説明が分かりにくく、話すスピードが速すぎると感じていることを意味している。

一方、表6に示したゲスト参加学生は、いずれの項目に対しても高い評価を与えている。これは、ゲスト参加学生の多くが平成16年12月から17年1月の2週間に渡りシドニー大学で行なわれた集中授業(短期留学)に参加し、今回の遠隔授業の講師と同じ講師からさまざまな授業を受けていたことが、最も大きな理由である。すなわち、ゲスト参加学生は講師とすでに面識があり、講師の説明の仕方や話し方に慣れていた。

表5 質問IIとその回答(受講生)

因子	項目	第1回目		第2回目		第3回目	
		Av.	S.D.	Av.	S.D.	Av.	S.D.
興味・関心等	1 国際遠隔授業に興味や関心がありますか?	—	—	3.75	0.50	4.00	0.00
	2 国際遠隔授業は有益であると思いますか?	—	—	3.75	0.50	4.00	0.00
	3 今後も国際遠隔授業を継続すべきだと思いますか?	—	—	3.75	0.50	4.00	0.00
遠隔システム	1 スクリーンの大きさは適切でしたか?	3.67	0.58	4.00	0.00	4.00	0.00
	2 画像は鮮明でしたか?	3.67	0.58	3.50	0.58	4.00	0.00
	3 文字の大きさや色は適切でしたか?	3.67	0.58	<u>2.75</u>	<u>1.26</u>	4.00	0.00
	4 スピーカーの音量は適切でしたか?	3.67	0.58	3.50	0.58	3.50	0.71
	5 音声は明瞭でしたか?	3.67	0.58	<u>2.75</u>	<u>1.50</u>	3.00	0.00
	6 ムウビーは見易かったですか?	4.00	0.00	3.00	0.82	4.00	0.00
授業内容・教授法	1 本日の授業内容は、このコースの内容として適切でしたか?	<u>3.33</u>	<u>1.15</u>	3.67	0.58	4.00	0.00
	2 本日の授業で使用したパワーポイントの資料は、理解の助けになりましたか?	3.67	0.58	<u>3.33</u>	<u>1.15</u>	4.00	0.00
	3 講師の説明の仕方や話し方は、分かりやすかったですか?	3.67	0.58	<u>3.25</u>	<u>1.50</u>	4.00	0.00
	4 講師の話すスピードは適切でしたか?	3.67	0.58	<u>3.25</u>	<u>1.50</u>	4.00	0.00
	5 講師と学生のコミュニケーションは、うまく取れていたと思いますか?	3.50	0.71	3.50	0.58	4.00	0.00
受講生	1 本日の授業内容を理解するために、あなたの英語の聞き取り能力は十分でしたか?	<u>2.67</u>	1.53	<u>3.00</u>	1.41	3.50	0.71
	2 本日の授業において、分からない言葉はどの程度ありましたか?	<u>2.00</u>	0.00	<u>2.25</u>	1.50	<u>2.50</u>	2.12
	3 授業に出てくるキーワードを予習しましたか?	1.33	0.58	<u>2.75</u>	0.96	4.00	0.00
授業環境	1 スクリーンや機の配置は適切でしたか?	<u>2.67</u>	0.58	3.50	0.58	3.00	1.41
	2 教室は静かな環境が保たれていましたか?	3.33	1.15	3.75	0.50	3.50	0.71

表6 質問Ⅱとその回答 (ゲスト参加学生)

因子	項目	第1回目		第2回目		第3回目	
		Av.	S.D.	Av.	S.D.	Av.	S.D.
興味・ 関心等	1 国際遠隔授業に興味や関心がありますか?	—	—	3.75	0.46	3.86	0.38
	2 国際遠隔授業は有益であると思いますか?	—	—	3.88	0.35	3.86	0.38
	3 今後も国際遠隔授業を継続すべきだと思いますか?	—	—	4.00	0.00	4.00	0.00
遠隔 システム	1 スクリーンの大きさは適切でしたか?	3.50	0.71	3.63	0.52	3.71	0.49
	2 画像は鮮明でしたか?	3.50	0.71	3.50	0.53	3.57	0.53
	3 文字の大きさや色は適切でしたか?	3.30	0.82	<u>3.13</u>	<u>0.83</u>	3.57	0.53
	4 スピーカーの音量は適切でしたか?	3.90	0.32	3.50	0.53	3.86	0.38
	5 音声は明瞭でしたか?	3.70	0.48	<u>2.13</u>	<u>0.99</u>	3.86	0.38
	6 ムウビーは見易かったですか?	3.30	0.67	<u>2.88</u>	<u>0.83</u>	3.57	0.53
授業内容・ 教授法	1 本日の授業内容は、このコースの内容として適切 でしたか?	3.70	0.48	3.88	0.35	3.86	0.38
	2 本日の授業で使用したパワーポイントの資料は、 理解の助けになりましたか?	3.90	0.32	4.00	0.00	3.86	0.38
	3 講師の説明の仕方やし方は、分かりやすかった ですか?	3.90	0.32	4.00	0.00	3.86	0.38
	4 講師の話すスピードは適切でしたか?	3.80	0.42	4.00	0.00	3.86	0.38
	5 講師と学生のコミュニケーションは、うまく取れ ていたと思いますか?	3.20	0.42	3.63	0.74	3.86	0.38
受講生	1 本日の授業内容を理解するために、あなたの英語 の聞き取り能力は十分でしたか?	3.30	0.95	3.50	1.07	3.43	1.13
	2 本日の授業において、分からない言葉はどの程度 ありましたか?	<u>2.70</u>	<u>1.16</u>	<u>2.50</u>	<u>1.41</u>	3.57	1.13
	3 授業に出てくるキーワードを予習しましたか?	<u>2.20</u>	<u>1.32</u>	<u>2.50</u>	<u>1.07</u>	<u>2.71</u>	<u>1.25</u>
授業環境	1 スクリーンや機の配置は適切でしたか?	<u>3.20</u>	<u>1.14</u>	3.38	0.74	3.43	1.13
	2 教室は静かな環境が保たれていましたか?	3.60	0.52	3.50	0.53	3.71	0.49

表7 因子別尺度平均値

因子	第1回目		第2回目		第3回目	
	受講生	ゲスト	受講生	ゲスト	受講生	ゲスト
興味・関心等	—	—	3.75	① 3.88	4.00	3.90
遠隔システム	① 3.72	② 3.53	3.25	④ 3.13	3.75	3.69
授業内容・教授法	① 3.60	① 3.70	3.45	① 3.90	4.00	3.86
受講生	④ 2.00	④ 2.73	2.67	⑤ 2.83	3.33	3.24
授業環境	③ 3.00	② 3.40	3.63	③ 3.44	3.25	3.57
平均	3.08	3.34	3.35	3.43	3.67	3.65

「遠隔システム」の因子に関して、受講生とゲスト参加学生はともに同じ傾向を示している。すなわち、第2回目の授業において、項目3「文字の大きさや色は適切でしたか?」、項目5「音声は明瞭でしたか?」、および項目6「ムウビーは見易かったですか?」に対する評価がかなり低い。これは、ビデオ教材が流れているとき、強烈なエコーが発生し、非常に聞き取りにくかったためである。第3回

目の授業でも、この問題が多少残っていた。この点に関して、質問Ⅳの自由記述にも同様の指摘が寄せられている。その他、スクリーンの大きさ、画像の鮮明さ、スピーカの音量などについては、問題がみられない。したがって、遠隔システムについては、ビデオ教材が流れているときにエコーが発生する原因を解明し、対策を立てることが今後の課題である。

「授業環境」の因子に関して、受講生とゲスト参加学生ともに第1回目の授業において、項目1「スクリーンや机の配置は適切でしたか？」に対する評価がやや低い。これは、遠隔講義室が少し狭かったこと、写真1にみられるように机の配置が適切でなく、スクリーンを見るために体を90度回転しなければならなかったことが、主な理由であると推測される。

「受講生」の因子に関して、表7に示したように受講生とゲスト参加学生ともに評価が最も低い。項目1「本日の授業内容を理解するために、あなたの英語の聞き取り能力は十分でしたか？」に対する受講生の評価が、第1回目と第2回目で低い。項目2「本日の授業において、分からない言葉はどの程度ありましたか？」に対する受講生の評価は、全ての授業でかなり低い。したがって、受講生の英語の聞き取り能力は十分ではなく、語彙が不足していると考えられる。項目3「授業に出てくるキーワードを予習しましたか？」に対する評価も低い。これは、授業で使用するハンドアウトが講義の直前に学生に配布されたので、十分予習する時間がなかったためである。一方、ゲスト参加の学生においても上記と同様の傾向がみられる。したがって、1週間前にはハンドアウトを配布し、学生に予習する時間を与えることが大切である。

3.3. 理解度について

質問Ⅲの小テスト（宿題）は、第1回目の授業で出てきた重要なキーワードに関する穴埋め式の問題である。以下に一例を示す。正解は、[1901]と[White Australia Policy]である。

The Immigration Restriction Act was passed in the year []. Although not its official name, this law is now known as the [].

上記のような穴埋め式の問題が11問出された。この宿題に取り組んだ学生は、受講生が3名、ゲスト参加学生が7名であった。表8に正答率の結果を示す。表より以下のことが明らかである。一部の問題（問題2と7）で正答率が低いが、受講生とゲスト参加学生ともに全体としては非常に高い正答率となっている。これは、問題が易しかったことと、家でハンドアウトを読み直して確認する時間が十分あったためである。この結果から、学生の授業理解度を推測することは少し困難である。また、受講生の正答率はゲスト参加学生の正答率より、幾分低い。

表8 質問Ⅲの正答率（単位％）

問 題	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	平均値
受 講 生	100	33	100	100	100	100	33	100	100	100	100	88
ゲスト参加学生	100	86	100	100	100	100	100	86	100	100	100	97

3.4. 考察

前節のアンケート調査結果を基に考察を付け加える。受講生は遠隔授業に強い関心と興味や必要性を感じている。しかし、受講生の英語の聞き取り能力は十分でなく、語彙も不足していたと考えられる。したがって、受講生の聞き取り能力や語彙力を高めることが重要である。また、事前に受講生の聞き取り能力や語彙力を何らかの方法で調査し、それに応じて講師の説明の仕方や話すスピードを調

整することも一方策である。しかし、講師の説明の仕方や話すスピードを極端に引き下げるとは、十分な講義内容を確保できないことに繋がる。したがって、授業に必要な英語の能力を授業案内に明記しておくことも重要である。今後、この課題に対する継続的な調査が望まれる。

遠隔システムについては、エコーが発生した点を除けばほぼ適切であった。今回は、岐阜大学、シドニー大学、岐阜聖徳学園大学の3地点を結んだ国際遠隔授業であったが、技術的な問題はほとんどみられなかった。しかし、教室が増えるので、講師と受講生との円滑なコミュニケーションを図るための工夫が必要である。

授業内容や教授法については、ほぼ適切であった。したがって、講義の内容やレベルなどを含めて、既存の授業の一部に遠隔授業を適切に組み込むことができたと考えられる。これは、授業者間で前もって合同の会議やメールによる連絡と準備を頻繁に行ったことが大きな理由である。

コンテンツ開発の観点から、授業の内容と位置付けを連携大学が明確に示すことが非常に重要であり、授業準備が格段に行ないやすくなる。また、コンテンツ開発は授業者にとって大きな負担であり、授業者の負担を軽減するようなサポート体制の確立が必要である。さらに、本研究が提唱した「モジュール交換」方式による遠隔授業は、供給者と需給者が同じとは限らないので、大学内での理解と協力が必要である。

一方、授業理解の観点から、ハンドアウトの事前配布と予習は非常に大切である。日本の学生は講義中手元に教科書や資料があることを望む傾向がある。英語による授業では、この点が特に顕著である。したがって、ハンドアウトの事前配布や予習と授業理解度との関係を調査することも、今後の課題である。

ゲスト参加学生のうち、集中講義に参加して、同じ講師の授業を何日も連続で受けた経験のある学生たちは、講師とも面識があり、感情的にもきわめて親密だったので、学習意欲がこの上なく高まっており、その意味ではそのほかの学生たちを鼓舞することになったかもしれない。質問も、少しではあるが、この学生たちから出ていた。しかし、最初のうち、講師自身の親密な意識が、ややもすれば、名前もすべて覚えている、集中講義に参加した学生により多く向けられているように見えてしまったのは、多分やむをえないことであった。これは、一面において、しゃべってくれる学生がいないと、インタラクティブな授業が成り立たないという宿命があるからであり、そもそも、遠隔授業では、純粹な講義のみでは単調になりすぎて、授業そのものが、急速に求心力を失うからである。とはいえ、いかなる授業といえども、講義の部分をゼロにするわけにはいかない。この点で講師は、授業の内容をすべて印刷したものを手元に用意させた上で、講義をしたので、受講者は随分気持ちの上で余裕が出来たことと思われる。また、難解な語はすべて辞書のやさしい定義をスクリーン上に提示しながら的確に説明を行った。さらに、同じことを何度も言い換えながら、噛んで含めるように授業を進めて行った。言葉のスピードはそれほど落ちなかったが、表現を変えて反復される分だけ、内容的理解はやさしくなっていたはずである。授業を受けている態度から見ても、学生たちは、話されていることの大部分は的確に内容把握できていると感じられた。遠隔授業をそばで見守っているものとしては、シドニー大学からの授業が、学生たちにきちんと理解された上で、関心を持って学習されていることを肌で感じられたことがなによりだった。

以上に述べたように、「モジュール交換方式」を用いた国際遠隔授業の試みは緒に就いた段階であり、遠隔授業の改善や理解度の向上を図るとともに、真の意味での教育効果が確認されるまで、同一の調査方法を用いて継続的なリサーチを行う必要がある。

4. 授業者の取り組み

本章は、授業者の立場から国際遠隔授業の準備、内容、考察および今後の課題について示したもの

であるが、文意を損なわないように原文で記載する。

4.1. 準備, 実施内容および考察

In January 2005 three lectures were transmitted from the University of Sydney. I was the lecturer. This module of lectures was included in the course "Cross Cultural Communication" convened by Professor Yasuo Nishizawa of Gifu University and offered to the Consortium.

In general terms, the subject of my lectures was Australian multiculturalism. First I presented an outline of the history and patterns of immigration. Then I presented audio-visual and written texts that portray cultural diversity within contemporary Australian society.

In preparing the lectures, a number of pedagogical issues arose. First and foremost I was aware that my students in Japan would not be native speakers of English, and within the group there would be varying levels of English language ability. The first question was thus how to make the material accessible and comprehensible, given that I would be lecturing completely in English. Second, I was aware that the technology supporting the international long-distance learning link-up could be taken advantage of to create an interactive learning experience.

In preparing and presenting the material, I tried to use clear and concise language that would be easy to understand. I repeated the most important points two or three ways, using a different sentence structure each time. I tried to avoid the use of jargon or figurative speech. I needed to use language that was not complicated to talk about complex concepts and ideas.

I also employed a number of teaching methods. First I presented a formal lecture, supported by a written copy (2300 words). As I read and explained the lecture material, the students followed using their own printed copy. At important points, I stopped and directed the students to annotate their copy (asking them to underline or highlight or add their own notes). This written and spoken narrative history of immigration was followed by a short documentary film, which complemented and illustrated the lecture material.

Before the class met again, I provided the students with a short test to be undertaken at home. Students were asked to fill in the blanks (missing words) in a series of factual statements based on the lecture material. This would be both a way of summarising and revising important points made during the lecture, and gaining a sense of how much the students had been able to comprehend.

The second class opened with a discussion of the test. This provided an opportunity for further clarification. Several students had contacted me by email to ask questions, and I also took some time to answer their enquiries. Their comments and questions were very interesting and showed that they had considered the material seriously. During the second lecture slot I presented audio-visual material. Several short films that imaged cultural diversity and raised important social issues were shown. There was time for a brief discussion before concluding the class.

The third class was in some ways the most interactive. The aim was to introduce the students to a literary text that portrayed cultural diversity and explored the issue of cross-cultural communication. The aim was also to actively involve the students in the reading and comprehension of the text. To this end I selected an excerpt from a radio play, since this type of writing is designed to be read out aloud (over the radio) rather than be performed on stage. Since the students had been given a copy of the text, several could take on roles in the play, while the rest could closely follow the script. I explained the characters and when and where the action was set. Then we performed the play. The students seemed to find this enjoyable as well as informative. Discussion of the theme and issues raised in the play completed

the class.

Over the course of the three classes, the students experienced a variety of learning styles. The series opened with a conventional 'talk and chalk' lecture, with provisions made for the fact that the language of instruction was not the student's native Japanese. Audio-visual material played an important role in both reinforcing the lecture material and introducing new subject matter. The students undertook some of the responsibility for their learning, as they were expected to complete a small task outside of class. Active questioning was encouraged, and several students did email comments and enquiries following each class. Finally, active participation was required of the students, as they performed and contributed to the learning environment. Understandably, the level of interactivity increased over the three weeks, as the students and I became more familiar with each other.

By initiating different types of classroom communication, I hoped that each student would come to his or her own understanding, and find a way to relate to the material. However, I also understood that it was my responsibility to present this series of lectures in a way that was meaningful in the context of Professor Nishizawa's course on "Cross Cultural Communication". My aim was to give the students some understanding of the Australian socio-cultural situation: the importance of immigration, and the ways in which Australian society now reflects the fact that people from all over the world live in Australia. However, this would need to be relevant to the broader aims of study. My students' understanding of Australia's cultural diversity needed to relate to their exploration of the social and cultural impact of the modernization and westernization of Japan.

There was scope for bringing out both points of similarity and divergence between Australian society and culture and that of Japan. Real benefit lay in the students developing a comparative awareness, and some insight into the ways countries other than Japan have experienced the interaction of cultures in a profound way.

My lectures needed to complement Professor Nishizawa's classes, and fit in with the material already covered in the course. I also needed to make such connections obvious, so that my module of lectures would not seem disconnected or incongruous. Therefore I introduced my series of lectures by citing the words of Kakuzo Okakura, a prominent Japanese intellectual whose work the students had studied during the course. Quoting from "The Book of Tea", I highlighted Okakura's concern for potential misunderstanding between cultures, but also his belief in the possibility of different cultures coexisting and 'supplementing' each other. Okakura's thinking had developed in response to Japan's relationship with the West, but his thoughts could also be insightful for understanding cultural diversity within Australian society. Indeed he may have been surprised to find that Australia is now like 'a tea-cup in which humanity has met.'

Several challenges faced me as a teacher presenting a module of international long-distance learning lectures. In specific terms these were to do with the language of instruction, and matching to the course of which this module was just one part. In general terms, one might say there is a cultural difference between Japanese and Australian classrooms.

An interesting irony confronted me. I was aiming to give my students some understanding of cultural difference. At the same time I was facing cultural difference in my own classroom. In this case the cultural difference was between a group of Japanese students and their Australian teacher. Fortunately I had had experience in face-to-face teaching with students from Shizuoka, Gifu and Nagoya City universities. This had given me some appreciation of what the students might expect of me, and what I could expect of them.

While certainly challenging, international long distance learning is ultimately very fulfilling. Receiving email messages from students was a great way of getting feedback after class. It was satisfying to learn, for example, that "Sonia's English was easy to understand." It was rewarding to see careful consideration: "I read through the study material of today's class in the train back from university. And now I have questions from today's class..." And of course I was pleased to hear my students say "I'm looking forward to meeting you again next week."

4.2. 今後の課題

There is great potential for further developing the international distance learning project. My experience so far leads me to make two suggestions for the future.

First, I suggest that a module system, with a minimum of three lectures, works the best. This allows the teacher and students to get to know each other, and makes enough time available for a variety of learning styles to be employed.

Second, emphasis must be placed on matching the module with the rest of the course. This will be important for the quality of the students' learning experience. In my case, for example, further connections between my and Professor Nishizawa's classes could be made. The interface of cultures provides a theoretical ground from which Professor Nishizawa can reevaluate Japan's 'cross-cultural communication', both in terms of ancient relationships with China and Korea, and Japan's more recent 'westernization'. An interesting contrast and comparison could be made with Australia's post-war expansion in terms of industry, economy and population, and the development of Australian's multicultural society.

Progress of the international distance learning project also depends upon the commitment and cooperation of the institutions involved. First, there is scope to expand the discipline base, within and possibly beyond the humanities. Second, regarding the size of a series of lectures, the transmission of an entire course could be considered. Third, there is capacity to increase participation in the International Network University Consortium.

The January 2005 lecture module was transmitted from the University of Sydney to Gifu University (as per the formal agreement). The lecture module was included in the course "Cross Cultural Communication" which Gifu University offered to the Consortium, or more precisely, to the universities participating in the Consortium. The January 2005 lecture module was therefore broadcast to two sites: Gifu University and Gifu Shotoku University. While the relationship between Gifu University and the University of Sydney may develop through the further exchange of lectures, there are potentially more universities in Gifu prefecture that may wish to participate in the International Network University Consortium. The question of how to increase member participation in the Consortium is an issue for further investigation. (Dr Sonia Mycak, Department of English, The University of Sydney, Australia)

5. おわりに

本研究では、「モジュール交換」方式によってシドニー大学から岐阜大学に配信された遠隔授業を対象に、遠隔授業の内容と位置付けについて検討した。また、受講生を対象に遠隔授業の評価と理解度に関するアンケート調査を行った。その結果、次のことが明らかになった。

受講生の遠隔授業に対する興味・関心は高い。遠隔システムに関して、ビデオ教材の配信について一部問題がみられた。しかし、3地点を結んだ国際遠隔授業を実施することができ、技術的な問題はほとんどみられなかった。授業内容と教授法に関しては評価が非常に高く、授業内容、講師の説明の

仕方や話し方、授業で使用したハンドアウトは適切であった。受講生に関して、受講生の聞き取り能力や語彙力を高めることが重要である。また、受講生の聞き取り能力や語彙力を調査し、それに応じて講師の説明の仕方や話すスピードを調整することや、授業を受けるために必要な英語の能力を授業案内に明記しておくことも重要である。ハンドアウトを事前に配布し、予習をさせることが大切である。一方、「モジュール交換」方式による遠隔授業の内容と位置付けは非常に重要であり、十分な打ち合わせと準備が不可欠である。コンテンツ開発は授業者にとって大きな負担であり、授業者の負担を軽減するようなサポート体制の確立が必要である。また、本研究が提唱した「モジュール交換」方式による遠隔授業は、供給者と需給者が同じとは限らないので、大学内での理解と協力が必要である。

謝辞

本稿は、遠隔授業の実施に尽力いただいたシドニー大学文学部のAdrian Mitchell教授に感謝する。また、アンケート調査にご協力いただいた岐阜大学教育学部と岐阜聖徳学園大学の学生諸君、およびゲストとして授業に参加いただいた岐阜大学教育学部の学生諸君に感謝する。

参考文献

- 江馬諭, ほか10名 (2004), 産官学連携共同研究成果報告書「ストリーミング配信技術を用いた遠隔授業に関する研究」, 岐阜大学国際遠隔教育研究プロジェクト
- 浦野義頼 (2000), GITI/GITSにおける遠隔教育関連の国際連携プロジェクト, メディア教育開発センター第5回バーチャル・ユニバーシティ研究フォーラム報告「海外との連携」, 167-174
- 西原明法, ほか5名 (2002), 衛星通信を用いる日タイ同時正規大学院講義, 日本教育工学会 第18回大会3-103-3, 545-546
- 福田収一, マーク・カトコスキー, ラリー・ライファー (2002), スタンフォード大学との遠隔PBL設計教育, 工学教育, 50(3), 64-69
- 八木啓介, ほか3名 (2001), UCLAとの遠隔講義プロジェクトTIDEにおけるシステム構成, 電子情報通信学会論文誌D-I I, J84-D-I I (6), 1132-1139
- 山田敏弘, ほか9名(2005), テレビ会議システムを用いたシドニー大学向け日本語授業の実践報告, 岐阜大学教育学部研究報告 (教育実践研究), 第7巻, 19-41

参考資料

以下の参考資料は、2002年から4年間シドニー大学で本研究に取り組んだ共著者の記録であり、文意を損なわないように原文で記載する。

Appendix A (Introduction to international long-distance learning link-up)

The international distance learning project involves the exchange of lectures between the Faculty of Education of Gifu University and the University of Sydney's Faculty of Arts. Live lectures are transmitted through audio-visual links. With this the University of Sydney has linked with the International Network University Consortium operated by the Gifu Prefectural Government. The Consortium operates "Cooperative classes" in partnership with the Prefectural Government and Prefecture-based Universities. The Prefectural Government has established a high-speed information network between 17 universities

throughout Gifu Prefecture. The Consortium aims to utilize multimedia (Video Conferencing Systems or the Internet) to provide distance lectures ("IT-driven Classes") to the participating universities. The IT-driven classes can be asynchronous (web-based distance education courses) or synchronous (live web casting through the Internet or live video conferencing).

This appears to be driven by structural reform of Japanese universities, which means that students can now attain credits from distance learning courses, and adult students can attend open lectures provided by universities. The participating universities give course credits to students. The Consortium seeks international involvement.

From October 2002 and throughout 2003, trial lecture transmissions were conducted using both ISDN (Integrated Services Digital Network) dial-up circuits and IP (Internet Protocol) links. In March of 2004 an agreement was formally concluded between Gifu University's Faculty of Education and the Faculty of Arts at the University of Sydney for the continuing provision of such lectures. By October 2004 a set of two lectures from Gifu had been incorporated into Japanese studies courses for Sydney University students. In January 2005 a module of three lectures was transmitted from the University of Sydney for inclusion in the course "Cross Cultural Communication" offered by Gifu University to the Consortium.

The project has generated considerable media interest, especially in Japan. The inaugural trial lecture transmission from Gifu University to the University of Sydney was reported in the national newspaper, the Australian (13/11/2002). In Japan the press has eight times reported on the international long-distance learning link-up between the universities of Sydney and Gifu. Three times this has had coverage on television nightly news. The formal ceremony for the signing of the agreement (conducted live over video conferencing link) was reported on Japanese television news broadcasts Japan Broadcasting Corporation (NHK) Gifu and Gifu BC; and reported in four Japanese newspapers: Asahi and Yomiuri (both nationwide), Chunichi News (regional), and Gifu News (local). The module of lectures transmitted in January 2005 was reported in two newspapers, Chunichi News (12/1/05) and Gifu News (12/1/05), and had coverage on "Rabu Rabu Waido Today" broadcast on Gifu TV (11/1/05).

While of international significance, the nature of the distance learning project is cross-disciplinary. So far involving incoming lectures on Japanese language and linguistics, and transmitting lectures in Australian studies, there is scope to involve other disciplines. Gifu University, for example, has recently offered to provide lectures on forms of Japanese music, and would welcome return lectures in Australian musicology. (Dr Sonia Mycak)

Appendix B (Telecommunications technology)

In September 2002, while I was assisting Dr Sonia Mycak of the University of Sydney during her lecture course at Nagoya City University, Professors Satoshi Ema and Yasuo Nishizawa of Gifu University contacted us through Professor Tadamasa Murai of Nagoya City. The proposal of Professors Ema and Nishizawa was for us to liaise with the University of Sydney to consider establishing an exchange of live lectures between the University of Sydney and Gifu University. This envisaged the lecturer in Gifu transmitting live audio-visual to a class of students at Sydney University, and the lecturer in Sydney transmitting to a class at Gifu University. The first trial was to take place some three weeks later, in October 2002. On our return to Sydney, Dr Mycak and I approached and received full support for the initiative from the Head of School, Professor Adrian Mitchell.

The first trial transmission of a lecture from Gifu to Sydney used the Integrated Services Digital

Network (ISDN) links as Internet Protocol (IP) tests were unsatisfactory. The high cost of ISDN was not going to be economical for an ongoing exchange of lectures and IP was further experimented with and is now the standard that has been adopted.

Personally and professionally this was of great interest to me as I am a graduate electrical engineer from the University of Sydney and have specialized in telecommunications technology. Early in my career, as an engineer with Telecom Australia, I was involved in the setting up of teleconferencing experiments over Australia's first domestic telecommunications satellite. In the late 1970s I was the manager of Telecom's teleconferencing facility between Australia's two largest cities, Sydney and Melbourne, using the then revolutionary 2 megabit per second links.

Telecommunications transmission has come a long way in the past forty years and the cost of transmission of information has fallen dramatically. As an example, less than fifty years ago telephone calls from Australia to Europe were over VHF radio links. The quality of transmission was very poor and the cost for a three-minute call was more than one day's pay for a person of average income. Even as late as the 1970's connections were still being set up manually and at that time Australia had the largest overseas manual telephone exchange in the world.

The invention and refinement of optical fibre technology and electronic digital networks have heralded a revolution in communications that many would not have imagined just a few years ago. I was therefore happy for the opportunity, presented to us by Professors Ema and Nishizawa, to become involved in the application of technology to transmit useful information. I believe this is the beginning of a trend and I am pleased that we are leading a trend rather than following one. (Andrew Bilinsky BE(Elec), Dipl. Crim, Project Manager)

Appendix C (The development of the international long-distance learning link-up: Chronology of events)

September 11, 2002: initial correspondence from Professor Yasuo Nishizawa of Gifu University to Dr Sonia Mycak (from the University of Sydney, teaching at Nagoya City University). Yasuo Nishizawa is Professor, Department of Life Long Education and Graduate Course of English Education, in the Faculty of Education of Gifu University. Sonia Mycak is an Australian Research Fellow of the Australian Research Council in the Department of English at the University of Sydney.

September 26, 2002: Dr Sonia Mycak and Mr Andrew Bilinsky meet Professors Yasuo Nishizawa and Satoshi Ema in Nagoya. Satoshi Ema is Professor of Technology Education in the Faculty of Education of Gifu University. Andrew Bilinsky is a consultant telecommunications engineer.

October 1, 2002: meeting between Dr Sonia Mycak, Mr Andrew Bilinsky and Professors Yasuo Nishizawa and Satoshi Ema at Gifu University.

October 28-31, 2002: delegation from Gifu University (Professors Yasuo Nishizawa, Satoshi Ema, and Masaya Matsubara) visits Sydney. Masaya Matsubara is Associate Professor in the Educational Research Center for Lifelong Learning.

October 28: meeting at the University of Sydney with Professors Adrian Mitchell, Hugh Clarke, Tim Fitzpatrick, Dr Sonia Mycak and Mr Andrew Bilinsky. Adrian Mitchell is Head of the School of English, Art History, Film and Media in the Faculty of Arts. Hugh Clarke is Head of the School of European, Asian and Middle Eastern Languages and Studies in the Faculty of Arts.

Tim Fitzpatrick is Head of the School of Society, Culture and Performance in the Faculty of Arts.

October 30: inaugural trial lecture transmission from Gifu University to University of Sydney (using ISDN video link). Yasuko Negishi, Professor of Japanese Literature in the Department of Japanese Education, is the lecturer.

Press coverage in Australia: report in the national Australian newspaper (13/11/2002).

December 10, 2002: second trial lecture transmission from Gifu University to University of Sydney (using ISDN video link). Professor Yasuo Nishizawa is the lecturer.

December 11, 2002: inaugural trial lecture from University of Sydney to Gifu University (using ISDN video link). Dr Sonia Mycak is the lecturer.

Press coverage in Japan: reports in two local newspapers, Gifu News and Chunichi News (12/12/2002).

March 3, 2003: second visit to Sydney by delegation from Gifu (Professors Yasuo Nishizawa, Satoshi Ema and Yasuko Negishi from Gifu University; and Ms Kyoko Fukute and Mr Tomohisa Mizoguchi from the Gifu Prefectural Government). Kyoko Fukute and Tomohisa Mizoguchi are officers of the International Network University Consortium.

Meeting at the University of Sydney with Professors Stephen Garton (Dean of the Faculty of Arts), Adrian Mitchell, Hugh Clarke, Elise Tipton (Director of Asian Studies in the Department of Japanese and Korean Studies), Dr Sonia Mycak and Mr Andrew Bilinsky.

October 22-25, 2003: third visit to Sydney by delegation from Gifu (Professors Yasuo Nishizawa and Satoshi Ema from Gifu University; and Mr Hideo Uno and Mr Tomohisa Mizoguchi from the Gifu Prefectural Government). Hideo Uno is Director of the International Network University Consortium.

October 22: Meeting at the University of Sydney with Professors Stephen Garton, Adrian Mitchell, Anthony Stephens (Head of the School of European, Asian and Middle Eastern Languages and Studies), Hugh Clarke, Dr Colin Noble (Lecturer in the School of Asian Studies), Dr Sonia Mycak and Mr Andrew Bilinsky.

October 23: first lecture transmission from Gifu University to the University of Sydney (using IP connection). Toshihiro Yamada, Associate Professor of Japanese Linguistics, is the lecturer. Second lecture transmission from Gifu University to the University of Sydney (using IP connection). Kazutaka Kobayashi, Associate Professor in the Faculty of Education, is the lecturer.

December 9, 2003: first lecture transmission from University of Sydney to Gifu University (using IP connection). Dr Sonia Mycak is the lecturer.

December 16, 2003: second lecture transmission from University of Sydney to Gifu University (using IP connection). Dr Penelope Van Toorn, Lecturer in the Department of Australian Studies, is the lecturer.

January 4-8, 2004: fourth visit to Sydney by delegation from Gifu University (Professors Yasuo Nishizawa, Satoshi Ema, Toshihiro Yamada, Kazutaka Kobayashi and Norio Hirota). Norio Hirota is Professor of Linguistics in the Department of English Teaching. Meeting at the University of Sydney with Professor Adrian Mitchell, Dr Sonia Mycak and Mr Andrew Bilinsky. Begin discussions on formulating an agreement between the Faculty of Arts of the University of Sydney and the Faculty of Education of Gifu University.

February 19, 2004: Professor Yasuo Nishizawa interviewed in Japan by newspaper Asahi.

March 2, 2004: ceremony (via video conferencing link) for the signing of a formal agreement. A "Memorandum Concerning the Lecture Exchange Program Through Distance Learning Systems Between Faculty of Arts, The University of Sydney, Australia and Faculty of Education, Gifu University, Japan" is signed by Professor Stephen Garton, Dean of the Faculty of Arts of the University of Sydney, and Professor Yoshimi Sasaki, Dean of the Faculty of Education of Gifu University.

Press coverage in Japan: reports on Japanese television news broadcasts Japan Broadcasting Corporation (NHK) Gifu and Gifu BC; and reports in four Japanese newspapers: Asahi Newspaper (nation-wide), Yomiuri Newspaper (nation-wide), Chunichi News (regional), and Gifu News (local).

June 2-6, 2004: visit by Dr Sonia Mycak and Mr Andrew Bilinsky to Gifu.

June 4: visit to the International Network University Consortium. Meeting with Mr Masaru Yoshida, Ms Makiko Niwa and Mr Yoshinori Masuda from the Consortium; Professors Yasuo Nishizawa and Satoshi Ema from Gifu University; and Professors Takafumi Hirose, Toshihide Ishihara and Naoki Okazaki from Gifu Shotoku University. Tour of Consortium facilities.

Welcome dinner with members of Gifu University and the Gifu Prefectural Government.

September 22 and October 20, 2004: two lecture transmissions from Gifu University to the University of Sydney (using IP connection). Professor Toshihiro Yamada is the lecturer.

November 18-19, 2004: visit by Dr Sonia Mycak and Mr Andrew Bilinsky to Tokyo. Meeting with Professors Yasuo Nishizawa and Satoshi Ema.

January 11, 18, 25, 2005: three lecture transmissions from the University of Sydney to Gifu University (using IP connection). Dr Sonia Mycak is the lecturer. This module of lectures is included in the course "Cross Cultural Communication" convened by Professor Yasuo Nishizawa and offered to the Consortium. Lectures transmitted to two sites: Gifu University and Gifu Shotoku University.

Press coverage in Japan: reports on Jan 11 lecture in two newspapers Chunichi News (12/1/05) and Gifu News (12/1/05); and coverage on Gifu TV Rabu Rabu Waido Today (11/1/05). (Dr Sonia Mycak)